

京鹿の子 娘道成寺 (娘道成寺) 宝暦三年(一七五三年)三月

作曲 杵屋弥三郎

長唄 タテ 吉住小三郎、早川新次郎、坂田仙四郎

三味線 タテ 初代 杵屋和三郎、杵屋孫三郎、

杵屋作十郎、杵屋小四郎

立方 中村富十郎

第三段

花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん

第四段

鐘に恨みは数々ござる。初夜の鐘を撞く時は 諸行無常と響くなり。

後夜の鐘を撞く時は 是生滅法と響くなり、

晨鐘の響きは生滅滅己 入相は寂滅為茶と響くなり。

聞いて驚く人もなし、我も五障の雲晴れて真如の月を眺め明かさん。

第五段

言はず語らぬ我が心、乱れし髪は乱るるも、

つれないは唯 移り気な、どうでも男は悪性者、

桜々と謡はれて、言うて袂の分二つ、勤めさへ唯 うかうかと、

どうでも女子は悪性者、都育ちは蓬葉なものぢやえ。

第六段

恋の別席、武士も道具を、伏編笠で、張と意気地の吉原。

花の都は歌でやわらぐ。敷島原に勤めする身は、誰と伏見の墨染。

煩惱菩提の撞木町より、難波四筋に、通ひ木辻に、

禿立ちから、室の早咲き、

それがほんに 色ぢや、

一イニウ三イ四ウ

夜露雪の日、下の関路も 共に此の身を馴染重ねて、

仲は丸山、ただ丸かれと、思い染めたが縁ぢやえ。

第七段

梅とさんさん桜は何れ兄やら弟やら、わきて言はれぬナ花の色え。

(合方)

昔浦杜若は何れ姉やら妹やら、わきて言はれぬナ花の色え。

(合方)

西も東も、みんなに見にきた花の顔、さよえ、

見れば恋ぞ増すえ、さよえ、

可愛らしさの花娘。

第八段

恋の手習、つい見習ひて、誰れに見しよとて紅鉄葉つけよぞ、

みんな主への心中立て、おお嬉し おお嬉し。

末はかうぢやにな、さうなる迄は、とんと言わずに済まきうぞと、

善紙さへ偽りが、嘘か誠か、どうもならぬほど逢ひに来た。

ふつつり悔気せまいぞと、嗜んで見ても 才、情なや

アア、女子には何がなる、

殿御殿御の気が知れぬ、気が知れぬ、悪性な悪性な 気が知れぬ。

恨み恨みて託ら泣き、

露を含みし桜花、触らば落ちん風情なり。

第九段

面白の四季の眺めや、三國一の富士の山、

雪かと思れば花の吹雪か吉野山、散り来る 散り来る 嵐山。

(合方)

朝日山々を見渡せば、歌の中山石山の、末の松山、いつか大江山、

第十段

いく野の道の遠けれど、恋路に通ふ浅間山、一と夜の情 有馬山、

いなせの言の葉 あすか木曾山 待乳山、

我三上山 祈り北山 稲荷山、

縁を結びし妹背山 二人が仲の黄金山、

花咲く栄枯の、このこの焼捨山、

峯の松風 音羽山、

入相の鐘を筑波山、

東叡山の月の顔ばせ三笠山。

第十一段

ただ頼め

氏神様が可愛がらしやんす 出雲の神様と約束あれば、つい新枕。

我三上山 祈り北山 稲荷山、

縁を結びし妹背山 二人が仲の黄金山、

深い仲ぢやと言ひ立てて、こちや こちや こちや、よい首尾で、

憎でらしい程いとらしらし。

花に心を深見草、

園に色よく咲初めて、紅をさすが 品よく形よく、

第十二段

ああ姿優しやしほらしや、

さつささうじやいな、さつさ さうじやいな。

第十三段

早月五月雨 早乙女早乙女 田植唄、早乙女早乙女 田植唄、

裾や袂を濡らした さつさア。

第十四段

花の姿の乱れ髪、

思へば思へば恨めしやとて、龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが、

引きかづいてぞ失せにける。

第十三段

謡ふも舞ふも法の声、エエ何でもせい エエ何でもせい、

春は花見の暮そゆかしき、夏は屋形の船ゆかし、

ヨイヨイヨイヨイヨイ

ありやりや こりやりや よいとな。

(合方)

秋は武蔵の月ぞ床しき、冬は雪見の亭床し

ヨイヨイヨイヨイヨイ

ありやりや こりやりや よいとな。

浮きに浮かれて 第一中有に迷うた。

懺悔懺悔 六根罪障、南無不動明王 南無不動明王、

エエ何でもせい エエ何でもせい。

動くか、動かぬか、曇誤三 蔓陀 縛日羅南

こりや動かぬぞ、

真言秘密で責めかけ責めかけ、

数珠の有りたけ やつさらさ やつさらさ、

旋修摩訶檀那 何のこつちやえ、

娑婆多耶呼多羅 何のこつちやえと祈りける。

第十四段

すはすは動くぞ 祈れただ、すはすは動くぞ 祈れただ。

引けやてんでに 千手の陀羅尼、

不動の慈救の偈、明王の火焰、黒煙を立ててぞ祈りける。

祈り祈られ、

撞かねどこの鐘 ひびきて、引かねどこの鐘 をどるとぞみえし、

程なく鐘樓に引き上げたり。

あれ見よ 蛇体はあらはれたり。

第十五段

謹請東方 青龍清淨、謹請西方 白体白龍、

一大三千大千世界の恒沙の龍王 哀愍納受、

哀愍自護の砌なれば、

何処に恨みの有るべきぞと、祈り祈られ飛び上り、

御法の声に金色の、花を降らせしその姿、

実にも妙なる奇特かや。

補注、赤字は歌舞伎舞台の「一段」(まとまった物語)であるが、

第一段と第二段は、参考とした底本の演劇上のイントロなので、この長唄の歌詞からは除外した。尚、段数は脚本によつて異なってくる。

今和五年八月一日

大中正比呂 記

